

William Dean Howells に於ける複合視点

——*A Foregone Conclusion* の場合

武 田 千枝子

I

William Dean Howells の *A Foregone Conclusion* (1875) は、イタリアに滞在するアメリカ人を描く彼の最初の国際小説と考えられている。そして、その中心人物はヴェニスで僧侶 Don Ippolito であり、アメリカ娘 Florida Vervain に対する彼の恋をいかにして成就させるかということが中心問題である、とする見方が多い。結末の部分の構成上の弱さを指摘して、物語は Don Ippolito の死で終るべきであった、という Henry James⁽¹⁾ をはじめとする大方の批評が、このような見方から必然的に生じたものであることは言うまでもない。僧侶の死をもって終る国際状況のもとでの悲恋物語としてこの作品を読むならば、それは Edwin H. Cady が指摘するように “the tragic inability of American innocence and guilty European sophistication to understand one another”⁽²⁾ を象徴するものであろう。しかし、この解釈に暗示されるような、アメリカとヨーロッパとの比較・対照という Henry James 的な国際テーマの作品と同列にこれを扱うことには問題があろう。さらに、執筆を開始して間もない Howells の言葉にうかがえる最初の計画⁽³⁾ が、悲劇的な結末を好まない当時の読者のために、出版社の意向により変更されるという外的な制約があったとはいえ、作者自身のこの結末に対する評価—“I feel pretty sure that I deepened the shadows by going on, and achieved a completer ver-

ity, also.”⁽⁴⁾ を全く無視してしまうことも出来ないように思われる。

Howells と James は国際小説の成熟期を代表する作家としてともに論じられることが少なくない。the American Girl の創造に関しては、James の初期の短編 “Travelling Companions” (1870) が Howells の *A Chance Acquaintance* (1873) に及ぼした影響についての指摘がある⁽⁵⁾。逆に、Howells の *A Foregone Conclusion* が James に二編の書評⁽⁶⁾ を書かせるほどの感銘を与え、彼のその後の国際小説に多大の影響を及ぼしたことはよく知られている⁽⁷⁾。しかし両者の国際小説の間には、このような相互間の影響から想像されるような近似性は表面的なもの以外殆ど見出せないと言ってよい。Thomas Wentworth Higginson は、国際テーマを扱う両作家の相違を次のように説明している。

After all, Mr. James has permanently set up his easel in Europe, Mr. Howells in America; and the latter has been, from the beginning, far less anxious to compare Americans with Europeans than with one another.⁽⁸⁾

Howells の国際小説はとりもおさずアメリカに於ける東と西の問題である。そして、その原型は *A Chance Acquaintance* であると言えよう。この作品はヨーロッパの色彩濃いクェベック地方を一部その舞台としているが、所謂国際状況を扱うものではない。しかし、二人の中人物であるボストン出身の Miles Arburton とニューヨーク州北西部に住む Kitty Ellison は、それぞれ Howells の世界に於ける基本的な二つの相対立する基準・価値体系を体现している。それは中西部で生まれ育ち、のち東部及びヨーロッパとの接触を経験した Howells 自身の内部に於ける対立、ひいては当時の彼が免れることの出来なかった作家としての方法論に関するディレンマの劇化でもある。東の基準はセンチメンタリスト (ロマンティシスト) としてヨーロッパに対する憧憬を動機として持ち、西のそれは、たとえ貧しい現実であっても、これを凝視することによ

って真実を把握しようとするアメリカ土着の精神を支柱とするリアリストのものである。このコントラストはHowellsの作品に一貫して流れるものであり、これら二つの基準を同時に備える人物はこの作家の世界の中核的存在となっている。このような役割を与えられているのは、作品の視点として機能する観察者であることが多い。

これら二つの相対立する基準を備えた観察者を複合視点と呼ぶ⁽⁹⁾。初期の作品では、この視点の内包する相反する立場の相克が劇的要素となっている。最初の旅行記 *Venetian Life* (1866) は観察者 Howells とヴェニス風景との間の一種のドラマではなかったであろうか。それはリアリストを志しながら、図らずもロマンティシストたることを露呈してしまう Howells を、分裂した個性を描き出している。感傷主義のヴェールを脱いだヴェニスを写すことを目指しながら、観察者はありのままのヴェニスではなく、歴史の光におぼろに輝くヴェニスを視てしまうのである。 *Suburban Sketches* (1871) に於いてこのロマンティシスト・リアリストの複合視点は、ボストン近郊の散文的な風景に対してロマンティックなアプローチとリアリスティックなアプローチとを併用することを余儀なくされた結果、それ自身のディレンマを跡付けてみせる。 *Their Wedding Journey* (1872) では、March 夫妻がそれぞれリアリストとロマンティシストの立場をわけ、互いに相手の基準を批判する。ボストンの基準から逸脱しそうな Basil とそれを固執する Isabel との衝突が二人の間に緊迫した空気を醸成し、新婚旅行に翳りを与える。これらの例は、Howells に於ける視点（あるいは観察者）が、単に客体を映し出す鏡としての機能的存在にとどまらず、人生との重要な接点として中心的な存在となっていることを物語っている。George C. Carrington の言葉を借りるなら、それは「人間関係の原型」⁽¹⁰⁾ である。ここで再び James との比較を用いるならば、この視点は James に於ける、構成上の中心であり、かつその世界に統一をもたらす透徹した中心の意識とは異質のものである。二つの立場が競合する複合体である故に、

この視点の判断は事態を解明するどころかむしろ混乱させずにはおかない。

II

A Foregone Conclusion の視点は Henry Ferris である。ヴェニス駐在のアメリカ領事である彼は、Don Ippolito と Florida の共通の友人として事件に巻き込まれる。Florida に対しては、僧侶を彼女のイタリー語の教師として紹介した責任者であり、Don Ippolito に対しては、同じ Florida を愛する競争者である彼は、Florida に対しあるいは Don Ippolito に対し、公平な姿勢を保つことが極めて困難な立場に置かれている。事件に直接の利害関係を持つ視点として、彼もまた積極的な行為者である。Don Ippolito が彼に Florida への愛を告げる14章以後は、Ferris のディレンマの描出が中心となって、物語は彼の意識のドラマの様相を呈してくることに注目したい。すなわち、Ferris はこの作品の構成の中心であり、主題である⁽¹¹⁾。この作品を彼の物語としてみるならば、それは真実探求の試みとその失敗ということになるだろう。

Henry Ferris は領事という実務家であり、同時に画家でもある。しかし自らを “I am a painter by profession, and I amuse myself with consuling.”⁽¹²⁾ という彼の意識の中では、領事職は偶然がもたらした慰みでしかない。しかし、本業たるべき画業の方も彼にとっては所詮は個人的な楽しみ以上のものではない。画家としての彼は “a theorist and a purist” (p. 246) であって、その作品は商品として殆ど役に立たない。領事職にも画業にも徹し切れない彼の姿勢は dilettante のそれである。彼が南北戦争に参加しながら “not much of a soldier” (p. 254) であったのも、そのために他ならない。ディレッタント Ferris のこの不毛性は彼が実際の性格の持主でないことを示している。彼が夢想家 Don Ippolito の詩的発明品やアメリカ行きの計画を評して “practical” でないと繰り返す時、それは皮肉にも彼自身の半面を指す言葉となるのである。彼もまたこの僧侶と同じようにロマンティシストである。

Ferris にとっての最大の関心事は Don Ippolito をどのように解釈すべきか、つまりこの picturesque で “dubious” (p. 72) な客体をどのように画布の上に捉えるべきか、ということである。その意味で、Ferris による Don Ippolito の肖像画は、この作品に統一を与える重要な役割を演じていると言える。先ず、それは複合視点である Ferris を分析する上での興味ある鍵となっている。そればかりでなく、彼の描いた何枚かの肖像画の一点は、僧侶の死後 Ferris と Florida とをアメリカで再会させるきっかけとなる。これは三人をめぐる “a tragico-comic end of the whole business” (p. 247) であると同時に、三人を再び一つの輪に結び付けることによって形式の上からも物語を終結へと導く。彼ら三人は恰も真実を主題とする輪舞曲を踊っているかのように、各々が一方の踊り手に彼（又は彼女）が知り得ない真実を明らかにする。すなわち、Ferris は Florida が僧侶 Don Ippolito の愛を受け容れることは決してないことを早くから見抜き、Florida は真実の鏡となって Don Ippolito に彼の真の姿を認識させ、Don Ippolito は Florida の愛が Ferris に注がれていることを彼に告げる。このような三人の相互関係と終章に於ける Don Ippolito の肖像画を挟んでの他の二人の再会とは、Don Ippolito の死までの部分とそれ以後書き継がれた部分とが作品の形式の上で関連性を有することを示しており、終章だけが孤立しているという批評に対する一つの反論となるであろう。

Ferris はその内部で二つの相反する要素（ロマンティシストとリアリスト）が奇妙に混り合った存在である。Don Ippolito の実体を捉えようとするとき、彼の内部ではこの二つの要素が常に拮抗している。

In those days, Ferris was an uncompromising enemy of the theatricalization of Italy, or indeed of anything; but the fancy of the black-robed young priest at work in this place appealed to him all the more potently because of the sort of tragic innocence which seemed to characterize Don Ippolito's expression. He longed intensely to sketch the

picture then and there, but he had strength to rebuke the fancy as something that could not make itself intelligible without the help of such accessories as he despised....(p. 49)

上の一節は、はじめて僧侶を訪問し、彼の肖像画を描きたいという衝動に駆られる Ferris を描く。この場面から僧侶の実体を見極めようとする彼の努力が始まる。それは彼の内部に於けるロマンティズムとリアリズムとの闘いに他ならない。ここに、最初の三つの旅行記に於ける Howells のディレンマが再びみられる。Ferris は装飾的夾雑物を排除してイタリーを視ようとするリアリストであると同時に、“Why should all this sketchable adversity be lavished upon the neighborhood of a city that is so rich as Venice in picturesque dilapidation? It's pretty hard on us Americans, and forces people of sensibility into exile.” (pp. 102-103) と叫ばずにはいられない美の渴望者でもある。この Ferris に対して picturesque な対象が逆にロマンティックなアプローチを迫るのである。彼はここではこの誘惑を斥けるものの深刻なディレンマに陥り、複合視点のもつ危険・限界を露呈していく。その後彼が Florida に語った肖像画の狙いは “the lingering pagan in the man, the renunciation first of the inherited nature, and then of a personality that would have enjoyed the world” であり “that baffled aspiration, apathetic despair, and rebellious longing which you catch in his face when he's off his guard, and that suppressed look which is the characteristic expression of all Austrian Venice” (pp. 75-76) であった。彼が僧侶の中に視ようとするものは、人間的な欲望をすべて犠牲にすることを強いられた悲壮な存在であり、ヴェニスという picturesque な場の中心となるにふさわしいロマンティックな存在である。そのためにはオーストリーの支配下にあるヴェニスの人々の特徴である抑圧された表情を僧侶に与えなければならない。彼らにはそのような表情がみられるという先入主が、この僧侶についての真実から彼を遠ざける危険性を

彼は自覚していない。彼は自ら否定したロマンティックな方法に依存するという自家撞着に陥っている。ここでその誤りを指摘するのは彼より一層立場の鮮明な “a person wholly abandoned to the truth” (p. 71) である Florida である。彼女はいう, “He has the simplest and openest look in the world... and there’s neither pagan, nor martyr, nor rebel in it.” (p. 76) しかし彼は彼女の未熟さを理由にこの見解を斥ける。

Florida の無垢と単純さは Ferris の経験と複合の存在と対照をなしている。彼女は高慢さと内気さとの奇妙な混り合いが魅力的な娘である。その矛盾する要素が周囲の人々を当惑させることは屢々あっても、彼女にあって変らないのは、彼女が “truth itself” (p. 193) であるということである。己れの気持を偽って聖職者として生きる苦痛からいかなる犠牲を払ってでも逃れるべきだ、という僧侶を勇気づける助言を与えるのも、その真意を計りかねるような苦痛を相手に与えた非を悪びれることなく認めるのも、等しく自分自身に対して忠実であるべきだとの彼女の信念に基づくものである。しかし彼女のこの徹底した真実主義は、はるかに経験に富む Ferris の目には不可解で未熟なものとししか映らない。一方、Ferris はモデルの Don Ippolito を前にして

...Ferris perceived in him an apparent single-heartedness such as no man can have but the rarest of Italians.... It was the half expectation of coming sometime upon the lurking duplicity in Don Ippolito, that continually enfeebled the painter in his attempts to portray his Venetian priest, and that gave its undecided, unsatisfactory character to the picture before him—its weak hardness, its provoking superficiality. He expressed the traits of melancholy and loss that he imagined in him, yet he always was tempted to leave the picture with a touch of something sinister in it, some airy and subtle shadow of selfish design. (p. 82)

彼には“an apparent single-heartedness”が僧侶の本質だとは思われない。背後にそのものの本質が潜んでいる筈だ、という先入主に基づいた淡い期待を払拭することが出来ない彼である。彼にとっては言語にしる絵筆にしる、それが一旦捉えた客体は“the undefined and the ideal where they really belong” (p. 89) とは別のものではないのか、という懸念が強い。この懸念が彼に決定的な判断を下すことを引き延ばさせている。Don Ippolito の死後再会した Florida と結婚した後も、僧侶の実体を見極めようとする彼の執念は変わらない。彼は、夢想家 Don Ippolito が環境に抑圧され、虚偽の人生を歩む哀れな自己像を想像力によって生み出し、それを彼の「真実」として生きてきた存在であり、同様に Florida への愛も“a gentle nature's dream of a passion” (p. 246) ではなかったか、と結論づけてはみるものの、やはり彼にとって僧侶は“a puzzle” (p. 264) であることに変わりはない。それは、彼と知り合った直後に Florida 向って“...he puzzles me, to begin with.” (p. 90) と述べた時から一步も前進していないのである。

背後に隠された真実の存在を想像することから生じる appearance に対する不信と事物をあるがままに捉えることの不能は、複合視点の悲劇であり、リアリスト Ferris の限界を示すものであると言うことが出来よう。この点での Ferris は Henry James の“Daisy Miller” (1878) に於ける Winterbourne を想い起させる。(両者の類似については後段で述べる。) Ferris の悲劇は、彼の最大の課題であった Don Ippolito に関する真実を把握出来なかったことである。それは何故に不可能であったのか。Don Ippolito の生と死は、この問題についての Ferris に与えられた教訓である。僧侶はその夢を実現することなく、彼にとっての真実を把握しかけた時に死を迎える。その死の意味は想像力が生み出すヴィジョンを「真実」として固執してきた、現実から余りにも隔たったそのロマンティシズムの敗北である。所詮は幻想に過ぎないものを唯一の「真実」として固執する姿は、悲劇的というよりは哀れを催させる。Fer-

ris はロマンティストの陥り易いこの危険を僧侶の死から読みとったのであろうか。この作品の語り手（領事 Ferris を “one of my predecessors” (p. 3) と呼んでいるところから作者 Howells と考えられる）は、物語の最後のパラグラフで次のように述べて終る。

... Don Ippolito has at last ceased to be even the memory of a man with a passionate love and a mortal sorrow. Perhaps this final effect in the mind of him who has realized the happiness of which the poor priest vainly dreamed is not the least tragic phase of the tragedy of Don Ippolito. (pp. 264-265)

Ferris は僧侶が得ることの出来なかった Florida を得たのみで彼の死から学ぶものはなかったのである。彼の心の中から消え去った僧侶は、僧侶自身の悲劇であると同時に Ferris の悲劇でもある。その限りに於ては、彼はおそらく同じような過ちを繰り返すであろう、語り手はその愚かさに対する無念の情をこめて語っている。さらにこの結末の部分に関連して第三の悲劇をあげるならば、それは Ferris と Florida との結婚生活の中の翳りである。高慢さとやさしさとが奇妙に入り混った彼女の激しい性格は彼を相変らず苦しめている。二人の対立する視点は依然として死んだ僧侶に対する見方を二分する。ここで我々は *Their Wedding Journey* の March 夫妻を想起するのである。リアリスト Basil とセンチメンタリスト Isabel の視点の衝突による緊張が旅行記の色彩濃いこの作品にドラマの要素を与えている。Ferris と Florida の場合も家庭生活に運命づけられた翳りから免れることが出来ない。その意味で「僧侶の夢だけに終わってしまった幸福を現実のものとした男」という表現に皮肉の調子がこめられている。従って、書き継がれた結末も一般の読者の期待に反して悲劇的な調子で終わっている。しかし、それは僧侶の死を結末とした場合より一そう陰影にとむ多面的な人生を写し出している。

III

A Foregone Conclusion に於ける Ferris の悲劇は、先にも触れたように、Henry James の “Daisy Miller” に於ける Winterbourne の場合を想起させる。この兩作品はイタリーをその主な舞台とすること、ヒロインのアメリカ娘 Florida と Daisy の、相反する二つの要素が奇妙に入り混った複雑な性格、そして脇役 Mrs. Vervain と Mrs. Miller の役割など類似点をいくつか持っている。Florida と Daisy はアメリカ小説の発展の上で “the increasingly complex character studies”⁽¹³⁾ として注目される画期的な性格創造の例である。しかし、これらの作品での彼女らはそれぞれ Ferris と Winterbourne という複合の存在と対照的な単純・無垢を表わすものとして相手の価値をはかる基準の役割を演じている。したがって、その複雑な性格にも拘らず、それ自身の変貌・成長をみせない点で Howells と James の他のヒロインと異なっている。

これら二つの作品を一層強く結びつけるのは、複合視点である Ferris と Winterbourne との間にみられる類似である。Winterbourne は Ferris と同様、作品の構成と主題の両面での中心人物である⁽¹⁴⁾。Ferris がそうであったように、Winterbourne も “a lover of the picturesque”⁽¹⁵⁾ で、実務の世界とは離れて暮らす dilettante である。アメリカ人であるがカルヴィニズムの首都ジュネーヴで教育を受けた彼の内部では、ジュネーヴの基準と既にうすれかけてきたアメリカの基準とが奇妙に入り混っている。第一部の舞台であるスイスのヴェヴェイはレマン湖を挟んでジュネーヴと対面しており、特に夏季の明るく解放的な雰囲気はアメリカの海水浴場を想わせる。この外的な状況は Winterbourne の複合視点と照応するものであることは言うまでもない。第一部の解放的な雰囲気に対して、第二部の舞台ローマは社交界の習慣のきびしい土地である。第一部と第二部との間にみられるこの対照は、Daisy に対して次第にきびしくなる Winterbourne の態度の変化と一致する。Ferris の視点同

様、Winterbourne の複合視点は統一をもたらすものではなく混乱を生み出す視点である。

Poor Winterbourne was amused, perplexed, and decidedly charmed. He had never yet heared a young girl express herself in just this fashion never, at least, save in cases where to say such things seemed a kind of demonstrative evidence of a certain laxity of deportment. And yet was he to accuse Miss Daisy Miller of actual or potential *inconduite*, as they said at Geneva? He felt that he had lived at Geneva so long that he had lost a good deal; he had become dishabituated to the American tone.⁽¹⁶⁾

知り合ったばかりの Daisy から Winterbourne が受けた印象は、彼自身の二重性と彼には比較の基準がない Daisy の複合的な性格の故に多様で一貫性を欠くものとなっている。Ferris にとっての Don Ippolito の如く、Winterbourne にとっての Daisy は最後の瞬間まで彼を当惑させ続けるのである。

ローマの月光のコロシュウムで Daisy と Giovanelli の姿を見出した Winterbourne は、彼女を取るに足りない娘と断定し、謎は解けたとする。このクライマックスは Howells の作品に於いて、月光の庭園での Don Ippolito に対する Florida の振舞いを誤解した Ferris が彼女を “a perfect brute” (p. 108) と断定するクライマックスに似通う。彼らがそのあやまてる判断に気付く、真実に直面するのは、失われたものの回復が容易でなくなった時である。Ferris は皮肉な巡り合わせで Florida を得ることが出来るが、彼らの結婚生活には一抹の翳りがあり、一方 Winterbourne にとっては Daisy は永久に失われたままである。Winterbourne の軽蔑する Giovanelli が彼女の本質を見抜いていたということは、先入主を入れずに対象をあるがままにみる姿勢の勝利を意味する。Ferris の敗北も先入主をもって Don Ippolito をみようとした視点の悲劇であった。彼がその悲劇の教訓を活かすことが出来なかったよう

に、Winterbourne もまた苦い教訓を忘れて元の不毛の生活に戻っていき、ジュネーヴからは“the most contradictory accounts of his motives of sojourn: a report that he is “studying” hard—an intimation that he is much interested in a very clever foreign lady”⁽¹⁷⁾ が伝えられてくる。この結末には Daisy の本質を見抜くことも、したがって彼女の愛に応えることも出来なかった Winterbourne の愚かさに対する作者の非難（それは Daisy に対する作者の同情ある憐みと表裏をなす）がこめられている。

A Foregone Conclusion と “Daisy Miller” はともに真実の探求における複合視点に対する、先入主にとらわれない純真な視点の勝利を描いてみせる。すなわち、真実をいかなる方法で把握すべきかの、真のリアリズム確立のための模索の過程を示したものであると言えよう。しかし、この両者はこうした類似点よりもむしろその相違点に於て注目されるべきであるのかもしれない。南北戦争に参加することでアメリカ人としての自己を証明しえたと感じるアメリカ人 Ferris の対象はイタリア人 Don Ippolito である。これに反して、Europeanized American である Winterbourne の対象は紛れもないアメリカ西部の産物 Daisy である。すなわち、視る者の世界が両者に於ては全く異なるのである。Howells は対象が何であれ、アメリカ人としての視点の模索に、James は半ばヨーロッパ的な、それは換言すればアメリカをも包含した総合的な、視点⁽¹⁸⁾の模索に腐心しているということになる。

複合視点のもつ矛盾のために Ferris が真実を把握することが出来なかったことにより、Don Ippolito は彼にとって、そしてまた読者にとっても謎のままのこされたのである。リアリスト Ferris の露呈した限界にも拘らず、この作品は Howells のリアリズム確立への確実な一歩である。*A Chance Acquaintance* で感傷主義に対して Kitty の表わす現実主義を選択した彼は、この作品に於ては逆に Don Ippolito の死とロマンティシスト Ferris の悲劇を通して感傷主義の敗北を描くことによって間接的にその選択を示したと言える。

Don Ippolito の死後の部分は Ferris のドラマに深味を加え、特に最後の判断を読者に委ねた未決定の結末は、*A Modern Instance* や Henry James の作品で用いられるこの種の結末の先がけとして注目に値するものであり、旅行記にはじまった Howells のリアリズムへの道程の中での一つの目ざましい道標となっている。リアリズムの作品の結末について Howells は後年次のように述べている。

In art, the catastrophe must be the close of the work, for otherwise there will be what is called an 'anti-climax,' a thing to be avoided. Life, on the other hand, is not afraid of anti-climaxes; it produces them daily. Art may stop where it pleases, life must go on. Realism endeavors to take note of the continuity which nothing can arrest for long, and considers it more important to the individual and humanity at large than the violent interruption.⁽¹⁹⁾

このようにみえてくると、多くの批評の対象となってきたこの結末の部分は、Howells の世界を探る鍵をいくつか秘めた興味深い材料と言えよう。

注

- (1) Henry James, "Howells's *A Foregone Conclusion*," *North American Review*, XII (January 1875), and "Howells's *A Foregone Conclusion*," *The Nation*, XIX (7 January 1875). Reprinted in *Literary Reviews and Essays by Henry James*, ed. Albert Mordell (New Haven, Conn.: College and University Press, 1957), pp. 202-215.
- (2) Edwin H. Cady, *The Road to Realism: The Early Years of William Dean Howells, 1837-1885* (Syracuse, N.Y.: Syracuse University Press, 1958), p. 190.
- (3) *Life in Letters of William Dean Howells* (1928), ed. Mildred Howells (New York: Russell & Russell, 1968), I, 175. Also see *ibid.*, I, 198.
- (4) *Ibid.*, I, 198.
- (5) Olov W. Fryckstedt, *In Quest of America: A Study of Howells' Early Development as a Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1958), pp. 145-149.

- (6) 注(1)参照。
- (7) Cornelia P. Kelley, *The Early Development of Henry James* (1930) (Urbana : University of Illinois Press, 1965), pp. 269-270. Also see Kenneth S. Lynn, *William Dean Howells : An American Life* (New York : Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1970), pp. 227-228.
- (8) Thomas Wentworth Higginson, "Howells," *The Literary World*, X (August 2, 1879). Reprinted in *Howells : A Century of Criticism*, ed. Kenneth E. Eble (Dallas, Tex. : Southern Methodist University Press, 1962), p. 15.
- (9) これは Higginson が "double point of view" (p. 15) と呼ぶものに近い。
- (10) George C. Carrington, Jr., *The Immense Complex Drama : The World and Art of the Howells Novels* (Columbus : Ohio State University Press, 1966), p. 28.
- (11) George C. Carrington, Jr. は上掲の書物の中で、この作品の中心人物と言えるのは Ferris である、との見解をとっている (pp. 25-29)。
- (12) William Dean Howells, *A Foregone Conclusion* (Upper Saddle River, N.J. : Gregg Press, 1970), p. 14. 以下、このテキストからの引用文の頁数はすべて本文中に記す。
- (13) Robert Falk, "The Rise of Realism, 1871-91," *American Literary History*, ed. H.H. Clark (Durham, N.C. : Duke University Press, 1953), p. 394.
- (14) Cf. James W. Gargano, "Daisy Miller : An Abortive Quest for Innocence," *South Atlantic Quarterly*, LIX (Winter, 1961). Reprinted in *James's Daisy Miller*, ed. William T. Stafford (New York : Charles Scribner's Sons, 1963), pp. 150-153.
- (15) Henry James, "Daisy Miller," *The Complete Tales of Henry James*, ed. Leon Edel (London : Rupert Hart-Davis, 1962), IV, 201.
- (16) *Ibid.*, IV, 150-151.
- (17) *Ibid.*, IV, 207.
- (18) Cf. Letter to Thomas Sergeant Perry (September 20, [1867]), *Selected Letters of Henry James*, ed. Leon Edel (London : Rupert Hart-Davis, 1956), p. 52 ; Letter to William James (October 29, 1888), *Letters of Henry James*, ed. Percy Lubbock (New York : Charles Scribner's Sons, 1920), I, 180.
- (19) Quoted in Edwin H. Cady, *The Realist at War : The Mature Years of William Dean Howells, 1885-1920* (Syracuse, N.Y. : Syracuse University Press, 1958), p. 137.